西日本新聞 文化欄

1988 年九月二十六日~十月八日

在持续保持那种紧张感的同时

未曾察觉自然之美

从久留米市沿着 JR 久大线旁的国道 210 号向东行驶，不久右手边便出现了耳纳连山。左侧是环抱筑后川的筑后平原，稻穗正沉甸甸地垂着。巴士行驶约一小时后，抵达了筑后川河滩上居住的尾花成春所在的福冈县浮羽郡吉井町。绵延的丘陵地带向东延伸。

下车后，壮观的白壁建筑与土藏仓库鳞次栉比，水量充沛的小溪清澈见底，水草在溪底摇曳。我沿着稻穗旁的小路漫步，不禁思索：为何在这片被美丽自然环抱的静谧小镇长大的青年，会执意描绘满是废铁与沥青的污秽画作？

“我曾痴迷于塞尚，认为绘画需要精神性。但随后席卷而来的非形式主义浪潮将我卷入漩涡，让我开始认为美丽的东西都该被踢开。原来我根本没意识到自然的美与伟大。”他在由江户时代土藏改造的工作室里如是说。

「愚蠢的团体」

尾花开始接触油画是在旧制中学就读的昭和十六年（1941 年）。毕业后他一边在公司工作，一边坚持绘画，自 1950 年起连续九年入选自由美术展。在县展中也屡获殊荣，1954 年更被推举为福冈县美术协会会员。1957 年九州派成立之际，他已是县内知名画家。虽受邀加入，却认为这个业余者居多的团体“毫无逻辑可言，简直荒唐可笑”。然而他仍不辞辛劳转乘火车前往福冈市，只因“渴望在年轻人的热忱中保持绘画的紧张感”。他既渴求田园地带所缺乏的刺激，又怀着超乎常人的反叛精神，与九州派的本质特质相契合。

他运用木屑、松针、沥青、油漆等材料，甚至用灯火灼烧画布。正在展出的九州派展览中悬挂的《黄色风景》便是此类作品，其中泥土气息扑面而来的色彩与质感，清晰可见筑后画家的传承脉络。这份对生活土地的深情，或许正是自然流露的写照吧。

在墨西哥乡间

我离开九州派时，正值该团体进入解体期的四十年代。如今回想，当时“方向不明，成员们都陷入歇斯底里的状态”。因一场争执，我抱着“拖拖拉拉地继续下去不合我性子”的念头脱离了团体，但尾花本人内心也充满焦虑与不安。创作失去了刺激，表达也陷入了瓶颈。

带着几分消极心态，1965 年他独自踏上墨西哥之旅。耗尽两年带薪假，在乡间城镇徒步四十日的穷游，彻底改变了他的人生轨迹。

“仿佛初次触碰到真实的自然风光。”在村落结识的印第安人曾送来一枚鸡蛋。“仅凭一枚鸡蛋就能维生。这是在即将富裕的日本早已遗忘的事。人们与自然共生的姿态令我动容。”必须描绘的景象开始浮现。

归国后，他前往距家一公里处的筑后川。

秋日阳光下，河面逆光闪耀。当太阳隐入云层，原野霎时宛如死寂，枯草如尸骸般绵延铺展。

“这是我初次感受到自然的尊严。”此后二十年，他始终执笔描绘河滩的草丛。

我执着地描绘筑后川

如今想来，“曾以为不倾注精神便不成画，因而忽视了自然，实则是对自然一无所知。”草丛的律动中亦可窥见自我，自然亦映照着社会的脉动。

我执着地描绘筑后川。以淡褐色与灰色勾勒的枯草，时而化作熊熊燃烧的情念，时而又成为被现代文明侵蚀的尸骸。

今夏起着手绘三幅 100 号巨作《天》《地》《水》三部曲。画面中遍布天空、太阳、山川、河流，以及装饰古坟般的纹样，其间点缀着形态奇异的飞鸟。

″如今海鸟竟飞临这片平原，栖居山林的鸟儿也纷纷下凡。自然破坏正在改变万物。如同毕加索的《格尔尼卡》，我想将这一切留传后世。」他面色阴郁地说道。

九州派曾是前卫美术的实验场。曾身处其中的尾花，如今萌生新念头：若终生描绘筑后川，这条河流与自身命运将如何交织？「重温当年那股热忱，在紧张中创作吧。」

前衛たちの軌跡

九州派から四半世紀

〈7〉

あの緊張感を持続させながら

尾花 成春(62) 〈福岡県吉井町〉

自然美に気付かず

久留米市からJR久大線に沿った国道210号を東に向かうと、間もなく右手に耳納連山が見えてきた。左手には筑後川を抱き込んで広がる筑後平野が裾を広らせている。バスは一時間ほど走って、筑後川の河畔を描く尾花成春が住む福岡県浮羽郡吉井町に着いた。なだらかな山並みは、さらに東へ伸びている。

バスを降りると壮大な白壁造りの家屋や土蔵が並び、水量が豊かな小川は澄んで、底の水草が見える。こんな美しい自然の中の静かな町に生まれ育った若者が、なぜガラクタやアスファルトで汚れた絵を描いたのだろうと考えながら、雑穀のそばの道を歩いた。

「セザンヌに傾倒して、絵を描き、二十五年から九年連続には精神性が必要と思っていた。そこに押し寄せてきたアンフォルメル（非定形）という時代の渦に巻き込まれ、美帯にはない刺激も欲しかったし、権威に対する人一倍強い反抗心も九州派の体質になじんだ。木くずや松葉、アスファルトやペンキを用い、ランプで画面を焼いたりした。

自田美術展入選。県展でも受賞を続け、二十九年には福岡県美術協会会員に推された。九州派結成の三十二年ごろ

しいものは、けとばせと思い始めた。自然の美や偉大さに気付いてなかったのだ」。江戸時代から続く土蔵を改造したアトリエで語る。

「アホらしい集団」

尾花が油絵を始めたのは旧制中学在学中の昭和十六年。絵を描く緊張感を持ち続けた卒業後も会社勤めのかたわら、

は、県内では知られた画家たった。誘われて加わったものの、素人が多い集団を「論理もなくアホらしい」と思っていたという。それでも汽車を乗り継いで福岡市に出かけたのは「若い人の熱気の中で、かったから」だった。

開催中の九州派展に掛かっている「黄色い風景」もそんな一点だが、泥のにおいがする色彩や質感に筑後の画家の系譜が見える。生活する土地への愛着が自然に表れたのだろうか。

メキシコの田舎で

九州派を離れたのは、九州派が解体期に入る四十年ごろだった。当時は「進む方向が定まらず、メンバーはヒステリー症状だった」と振り返る。一つのけんかをきっかけに「だらだら続けるのは性に合わん」と飛び出したものの、尾花自身にも、焦りと不安があった。刺激を失った表現にも行きづまりを感じていた。

投げやりな気分もあって、四十年に単身、メキシコに出かけた。二年分の有給休暇をとって田舎町を歩き回った四十日間の貧乏旅行が、そのごの方向を大きく変えた。

「真実の自然の風景に初めて触れた気がした」。小村で

土蔵を改造したアトリエでの尾花さん

親しくなったインディオが、卵を一個持ってきてくれた。「卵一個あれば生きてゆける。豊かになりかけた日本では忘れていたこと。自然と一体になって生きる人々の姿に感動した」。描かねばならぬことが見え始めていた。

帰国して、自宅から一キロほどの筑後川に行ってみた。

秋の日差しの中で、川は逆光に輝いていた。太陽が雲にかくれた。一瞬、野原が死んだように見えた。死線（しがい）が数々と並んでいるようだった。「初めて自然の躍動を感じた」と言う。以来二十年、河原の草むらを描くことになる。

ひたすら筑後川を

「精神を込めなければ絵ではないと自然を無視していたが、自然を知らなかったのだとさえ思う。草むらの動きに自己を見ることもできるし、自然は社会の動きを反映もする。

ひたすら筑後川を描いた。淡いセピア色や灰色で描かれた枯れ草は、ある時は燃え上がる情念になり、また現代文明に侵食されたしかばねだったりする。

この夏から百号三枚に「天」「地」「水」の連作に取りかかった。空や太陽や山、川、装飾古墳のような模様で埋まる画面のあちこちに奇妙な形の鳥が描かれている。

「こんな平野に海鳥が飛んでくるようになった。山の中にすむ鳥が下りてくる。自然破壊がなにかを変えている。ピカソのゲルニカのように、のちの人に伝えておきたい」と顔を曇らせた。

九州派は前衛美術の一つの実験だった。そこに身を置いたことのある尾花は、筑後川を死ぬまで描いたら、川は、自分はどうなるかを実験しようと思い始めている。「あの時の熱気を思い出して、緊張させながらね」＝敬称略＝

（吉田造記者）

九州派展 10日まで、福岡市中央区大濠公園、福岡市美術館。